

L'Arc～en～Cielとファンの関係性

——国民的バンドとファンが作り出す一定の「距離」とその意味とは——

社会学部4年 田中可那子

<目次>

序章 スター要素としてのファン	(2) 「遠さ」が抱かせるL'Arc～en～Ciel の理想像—アンケート調査から—
I L'Arc～en～Cielがとる「距離」	III L'Arc～en～Cielとファンの関係性
(1) L'Arc～en～Cielとは	IV バンド成功における「距離」の重要性
(2) ファンに対する「押し」と「引き」	参考文献
II 近づきたがらないファン	
(1) ファンが感じる心地よい「遠さ」 —インタビュー調査から—	

序章 スター要素としてのファン

フランス語で「虹」を意味するバンド名を持ち、日本国内だけではなく世界でも活躍するロックバンドL'Arc～en～Ciel。アニメやCMのタイアップ、紅白歌合戦等のテレビ出演も精力的に行っているため、ファンでなくとも一度はこのバンド名や彼らの楽曲を耳にしたことがあるのではないだろうか。

彼らは2011年に結成20周年を迎え、Mr.Children、B'zに続き、史上3組目としてDVD総売上100万枚を突破した¹⁾。歴史の長さだけでなく、音楽が売れないと言われる中でも結果を残しているバンドだ。

国民的ロックバンドとして安定した位置を確立し、固定ファンも多くいるはずのL'Arc～en～Ciel。後に詳しく紹介するが、大物と呼ばれる存在であるにも関わらず、ファンとの直接的な交流が多く見られる。今日、AKB48をはじめ、さまざまなアーティストが握手会等の、ファンと物理的な距離を埋めるようなイベントを開いている。しかし、20年を超え、セールスもあるバ

ンドが、そのようにファンとの交流を行っていることは興味深い点である。

社会心理学者の南博は、人気者となる要因を、スターに対する (1) 親近感 (2) 優越感 (3) 尊敬、あこがれの三点挙げている。スターの親しみやすい庶民的な容姿によって、ファンとの心理的な距離を縮めさせ、同一化や共感をおこすことが (1) 親近感である。(2) 優越感とは、滑稽な風采をした喜劇スターなど、人気の対象となる人物に対し、ファンが自分よりも劣位を抱くことから生じる。(3) 尊敬、あこがれは、映画スターのような美しさや性的な魅力などが、客観的に心理的な距離をおき、あるいは同一化として、ファンを引き付けることである。これら三点の要因が絡み合うことでスターが生まれるのだという²⁾。

しかし、高度成長期以降、誰もが豊かになっていく中で、ファンは尊敬や憧れよりも、親近感を重視するようになった。美空ひばりのような「大衆」に受けるスターではなく、「中身のない」アイドルがファンを獲得するような時代が訪れたと指摘されている。手の届かぬ存在であることやカリスマ性ではなく、身近に感じる存在であることが重要な要素になっていったのである³⁾。

一方で、宝塚スターとファンの距離について研究した、社会学者の宮本直美によると、宝塚のファンクラブでは「スターとしての価値を高めるために、ファンが容易に近づけないように」、意図的に「距離をコントロールしている」という⁴⁾。研修生というファンがあまりついていない宝塚の生徒たちはファンとの交流を頻繁に行っているが、スターにのぼり詰めた人物は、その価値を高めるために「距離」をあえて作り出しているのだ。さらに、社会学者の小川博司は、パフォーマンスの時間・空間を限定し、緊張感を生み出すことで、その音楽に対する飽きを防ぐとも指摘している⁵⁾。ファンと距離をおくことが、そのアーティストや音楽の価値を生み出す要因となる。

親近感を感じられることが今日における人気の要素ではあるが、スターとして、アーティストとしての価値を存続させ、ファンを飽きさせないためには、ファンと離れてしまうことも必要である。アーティストとしての才能だけでなく、ファンといかにして関係を築くかということが、アーティストの

成功の鍵となるものの、その「距離」は非常に複雑なものである。

そのような、親近感としての近さとパフォーマンスの限定が、スターとその価値を生むという、ファンとアーティストの複雑な「距離」というものを明らかにしたいと考えたことが本研究におけるきっかけである。

本稿では、バンドとして成功を収めた事例のひとつとして、L'Arc~en~Cielを研究対象とする。ファンとの交流を盛んに行っているL'Arc~en~Cielはファンとの距離に何かしらの意味を感じているのではと考えられるためである。また、筆者が10年近くファンとして関わってきたバンドであるため、ファンクラブ会報等の有効な資料を多く所有していることも理由のひとつである。そのようなL'Arc~en~Cielを本稿における研究対象とすることで、アーティスト成功におけるファンとの距離感の重要性を示したい。

まず、I章でL'Arc~en~Cielがファンをどのように捉えているのかを、ファンクラブ会報誌等のメンバーのインタビューを基に読み取り、II章では、L'Arc~en~Cielのファンへのインタビュー調査やアンケート調査から、ファンからとるL'Arc~en~Cielとの距離を考察する。III章で、両者が築いている関係を明らかにし、IV章で、L'Arc~en~Cielとファンの関係性から考えられる、昨今の音楽産業における成功の秘密、そして本稿の問題点を提示し、まとめとする。

本題に入る前に、本稿におけるL'Arc~en~Cielの活動の範囲とファンを定義づけたい。L'Arc~en~Cielの活動は、各メンバーのソロ活動も含むこととする。ファンはファン歴が5年以上、L'Arc~en~Cielが各メンバーのソロ活動のいずれかのファンクラブに入会している、熱心なファンを対象とする。

I L'Arc~en~Cielがとる「距離」

(1) L'Arc~en~Cielとは

まず始めにL'Arc~en~Ciel（以下ラルク）というバンドについて簡単に説明しておきたい。

写真1 L'Arc〜en〜Ciel⁶⁾



(左からVocal. hyde, Guitar. ken, Bass. tetsuya, Drums. yukihiro)

ラルクは1991年にベースのtetsuyaを中心に大阪で結成された4人組ロックバンドである。シングル39枚、アルバム12枚を発売(2012年12月現在)。4人全員が作曲し、主にhydeが作詞を担当する。GLAYと並び1990年代後半に全盛期を迎え、幅広い楽曲や前代未聞のプロモーション方法⁷⁾などから、数多くのミリオンヒットを記録している。数回の活動休止・再開を経て、2011年にバンド結成20周年を迎えた。2012年初春には、世界10ヶ国14都市17公演を回るワールドツアーを敢行し、総動員45万人を記録。このツアーでは日本人単独初となる、ニューヨークのマディソンスクエアガーデンでのライブも成功させ、話題となった。

また、メンバー全員がソロとしても精力的に活動している。ヴォーカルhydeは2000年からHYDEとして活動を行い、2008年にはロックユニットVAMPSを結成した。ギター kenはSONS OF ALL PUSSYSやKenとして活動。ベースのtetsuyaはTETSUYA(2010年、TETSU 69から変更)名義で、ドラムのyukihiroもacid androidとしてヴォーカルを務める。

ラルクはバンドとして楽曲を発表する以外に、さまざまなファン参加型の活動・ファンサービスを行っている。その中から特徴的と思われるものの一部を挙げたものが次の表である。

表1 L'Arc~en~Ciel活動分類表

<p>リクエスト投票によるファンの意見の反映</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●『Clicked Singles Best 13』(2001. 3. 14) ラルク初のベストアルバム。収録曲を、世界8か国(日本, 中国, 台湾, 香港, タイ, シンガポール, マレーシア, フィリピン)のファンの投票により決定。 ●15th L' Anniversary Live (2006. 11. 25~26)の演奏曲についてファンのリクエスト投票を実施。上位曲の一部をライブで演奏。 ●次回ワールドツアー開催地を世界中の投票にて決定。インターネットを通じて投票受付中。(2012年12月現在)
<p>ファンとの直接的な交流イベント</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●ファンクラブ企画『ハワイアンシエル』(2012. 5. 31~6. 1) 20th L' Anniversary Yearを締めくくるイベントとして、ハワイ・ホノルルで開催。ライブやメンバー企画のアクティビティに参加できる。tetsuyaが参加者一人一人の名前を書いたTシャツをプレゼントしたり、kenとゴルフができる等のファンサービスを実施。 ●VAMPSファンクラブイベント『VAMPADDICT』(2009. 10) 全国のZEPPIにてオフ会を開催。ファンを入れての写真撮影、ファン参加のクイズやゲーム、握手会を行った。 ●Ken握手会(2009. 4, 2010. 8) ラゾーナ川崎、湊町リバープレイス、東武動物公園にてCD購入者全員を対象に握手会を開催。 ●TETSUYA『Happy Bus Day Tour』(2010. 10. 3) CD購入者から抽選でTETSUYAのバースデーシークレットイベントに招待。TETSUYAがプライベートで訪れる場所を、ファンがバスで回るツアー。イベント終了時にTETSUYA本人が参加者全員にオリジナルTシャツを手渡し。
<p>インターネットによる交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●HYDE(ソロ名義)ファンクラブ『HYDEIST』 HYDEのファンクラブサイトにてHYDE本人が、ファン同士の交流に使用する掲示板に書き込みを残したり、ファンがHYDEとチャットやゲームをすることができる。HYDEのオフの様子を生中継(音声なし)で見ることができるWEBカメラも視聴可能である。 ●Kenツイッター ID: CHLionRagbaby Kenが自身の行動等をツイートするのではなく、ファンとのやりとりが中心。不定期ではあるが、ファンのリプライに約1分に1~2ツイートというペースで返信し、100件以上のやりとりが行われている。

筆者作成

ラルクがファンに対して行っている活動は、大きく三つに分類できる。CDへの収録曲やライブの演奏曲のリクエストを募る、①リクエスト投票によるファンの意見の反映。握手会やプレゼントの手渡し等の②ファンとの直接的な交流イベント。ファンクラブサイトやツイッターを介した、③インターネットによる交流。以上の三点である。

先にも述べたが、20周年を超え、今さら新規ファンの獲得に力を入れる必要もないであろう国民的バンドが、このようなファンサービスを行っていることは注目すべき点である。ここからラルクにとってファンが、CDを買ってくれるだけではない、特別な存在であることが窺える。では、ラルクにとってファンはどのように「特別」であるのか。ラルクのメンバーのインタビュー記事をもとに明らかにしていきたい。

(2) ファンに対する「押し」と「引き」

ここでは、ラルクがインタビューでファンについて言及している部分を取り上げ、彼らがファンに対して抱いている意識を探っていく。メンバーがより本音に近い部分を語っているであろう、ラルクのファンクラブの会報誌『LE-CIEL』と、ラルクやソロのオフィシャルブック、自叙伝のインタビューを対象とした。

メンバーの発言は大きく二つの傾向が見られた。ひとつは、ファンを信頼し、大事にしていると取れる発言、もうひとつは、ファンを突き放しているような発言である。本稿では、前者を「押し」の発言、後者を「引き」の発言と分類した。それぞれの発言について詳しく見ていきたい。

「自分らの作った音楽を伝えたい伝えたいっていう気持ちはずっと一緒なんだけど、昔よりもどんどん近くなってる気がする。昔だったら、ライヴハウスで狭くて近くて、顔とか見れて、直接的なことが多かったんだけど、演る場所は広くなってるんだけど、逆にどんどん気持ちの上では近くなってるような気がする。(中略) 感覚が…俺らの出す音

楽であったり喋りでもあるのかもしれないけど…それと一致してる人達なんだろうなって思ってるから、親密に感じてる (ken)』⁸⁾

「一方通行じゃない想いみたいなものをすごく感じられたんですよ。(中略)そこに参加してくれるファンの人が「よかった」って言ってくれなきゃ成り立たない部分って大きいよなーって。なんか、自分たちが楽しんでやってることに対して、同じように楽しんでくれるファンの人がいるっていうことは、すばらしいなと思ったんですよ。(ken)』⁹⁾

「俺らのファンって、すごくコアな人が多いなっていう印象。本質を愛してくれてる人が多いんじゃないかと思ってるんだ。ファンが俺達の活動の全てを支えているし、あの手この手で喜ばせる事が醍醐味でもある。(中略)俺が言うのもなんだけど「L'Arc～en～Cielのアルバムは、次も絶対に買うよ」って言ってくれる人は、多分、信頼してくれてるんだと思うんだ。その反応が、俺達の自信にも繋がるから、また前へ進んでいけるんだけど。(中略)俺はファンを兄弟みたいに思ってる。弟とか妹って感じかな。(中略)やっぱりバンドって、バンドだけでやっても自分の想像した所にしか行けないと思うんだけど、ファンが居て、そこで相乗効果が生まれると、自分達の知らない、想像以上の所に行けたりもするんだよね。(中略)今後も、俺は強気で自分が信じる作品を作っていくつもり。そう言えるのは、ファンが信頼してくれてるからだよね。(hyde)』¹⁰⁾

「これからもっとファンのことをいちばんに考えてちゃんとやらないと。何やってもついてきてくれると思っちゃダメだと思う。(tetsuya)』¹¹⁾

「もともとラルク アン シエルって、特に初期はすごくファンと距離があったと思うのね。(中略)ファンからしたら、ちょっと近寄りがたいっ

というか……。そういう時代を考えると、今のほうが気持ち的には近い気がするかな。(中略) 何年もライブやらなくても待っててくれるし。ラルク アン シエルとファンってそういうことをずっとくり返してきたんだよね。(中略) たまにしか会えないかもしれないけど、でもちゃんと必ず会えるっていうか。(hyde)』¹²⁾

「僕らとファン、ライブに来てくれている人たちが、いい感じに近づいているんだろうなって、感じましたね。(ken)』¹³⁾

上に挙げたものが「押し」の発言、つまりラルクがファンを想い、大切にしていることを表現しているものである。これらの発言をすること、またそういう考えを持っていることは、アーティストに限らず、ファンを持つ立場であれば、なんら不思議ではなく、むしろ当たり前のことであろう。注目すべきは、「引き」の発言である。「引き」の発言は、以下のようなものである。

「お客さんのご意見箱を置いといて、その意見のとおりによれば、よくなるとも限らないだろうし。感謝はしてるけど、ファンの人の意見に振り回されたくはないなと。(中略) ファンのためにこうしてやっているんだ、愛してるんだよって言うことが偽善っぽくて嫌いなんですよ。(tetsuya)』¹⁴⁾

「ファンの子には俺のことがそこまで伝わらないんだよね。(中略) ファンの子っていい子が多いから、まあ俺の思ってること全部は伝わらないなって……。そういう俺のねじれたところ以外は伝わったような気がするんだけど(笑) (hyde)』¹⁵⁾

「お客さんが求めるもの、ファンが求めるものだけを作ればそれが改善

されるわけではなく。当然ファンの意見もすごく大事だし、身近な古いスタッフの意見も凄く大事だけど、新しい意見——ファンじゃない人の意見、新しいスタッフの意見を大事にして、今までやってこなかったことや気付いてこなかったことをいろいろ試して行かなきゃいけないんじゃないかなって思う。(tetsuya)』¹⁶⁾

「ファンとしては、憧れの人は遠くの存在、手の届かないところにいてほしい。(中略) 当時はフライヤーもメンバーが配るバンドが多かったんだけど、僕らは1回もやったことない。(中略) ラルク アン シエルを“気さくなお兄さん”にはしたくなかったんですよね。(tetsuya)』¹⁷⁾

「ファンの言う通りに全部やってあげるのは違うなとも思ってて。(hyde)』¹⁸⁾

ファンが目を通すと分かっている媒体を通じ、このようなファンを突き放すような発言がなされている。恋愛に例えると、自分のことを好きだと言ってくれ、支えてくれている人に対し、「あなたは私のことを全部分かってくれているわけではないし、それほど近づきたくはない」と言っているようなものである。この発言によってファンが離れていく可能性があるにも関わらず、あえて言う必要はあるのだろうか。この「引き」の発言こそがラルクがファンに対して持っている意識の特徴的な部分である。

さらに「押し」の発言で見られた、ラルクの活動が長くなるにつれて、ファンとの「距離」が縮まっていることを示す発言にも注目したい。世界的なバンドとして活動し、大きな存在となる一方で、心的な距離は縮まっているという。一見、矛盾しているようにもとれるこの関係性が、ラルクとファンの距離を紐解く要素となるのではないか。

上記に挙げたメンバーの発言の中で、特に典型と思われるものをまとめたものが表2である。このように、ファンを突き放すような「引き」の発言、

そして活動経歴と反比例する「距離」がラルクの特徴であると考えられる。

表2 インタビュー発言分類表

「押し」の発言	「引き」の発言
<p>「どんどん気持ちの上では近くなってるような気がする (ken)」</p> <p>「一方通行じゃない想いたいなものをすごく感じられた (ken)」</p> <p>「本質を愛してくれてる人が多い (中略) 俺はファンを兄弟みたいに思ってた (hyde)」</p> <p>「初期はすごくファンと距離があった (中略) そういう時代を考えると、今のほうが気持ち的には近い気がする (hyde)」</p> <p>「僕らとファン、ライブに来てくれている人たちが、いい感じに近づいているんだらうなって、感じましたね。(ken)」</p>	<p>「ファンの人の意見に振り回されたくはない (tetsuya)」</p> <p>「ファンの子には俺のことがそこまで伝わらない (hyde)」</p> <p>「お客さんが求めるもの、ファンが求めるものだけを作ればそれが改善されるわけではなく (tetsuya)」</p> <p>「ラルク アン シエルを“気さくなお兄さん”にはしたくなかった (tetsuya)」</p> <p>「ファンの言う通りに全部やってあげるのは違うなとも思ってた。(hyde)」</p>

筆者作成

II 近づきたがらないファン

(1) ファンが感じる心地よい「遠さ」—インタビュー調査から—

次に、ファンがラルクに対して抱いている意識を明らかにしていく。ラルク側の意識と同様、本音を引き出すことが必要となるため、質的データを得られる、インタビュー調査を行った。インタビューの協力を得られたのは、筆者の友人である、Tさん (21 歳, 女性, ファン歴 10 年目, ファンクラブ歴 5 年目), Mさん (21 歳, 女性, ファン歴 10 年目, ファンクラブ歴 6 年目), Aさん (22 歳, 女性, ファン歴 12 年目, ファンクラブ歴 12 年目) の 3 名である。

Tさんがラルクのファンになったきっかけは、3歳上の姉の影響で、映画「MOON CHILD」¹⁹⁾を見たこと。hydeの外見に惹かれ、もっと知りたいと昔のアルバムを集め、聴くようになったという。Mさんは、2003年、ヴォーカル

hydeがソロで活発に活動し、メディアへの露出が多かった頃、Tさんと同じくhydeの外見に惹かれたことがファンになるきっかけであった。Aさんは、テレビの歌番組に出演していたラルクの異質さが目に留まり、その後音楽好きの友人の影響も受け、自分の中でラルクが存在が大きくなっていったと話す。

TさんとMさんは2012年9月16日に約1時間半、Aさんは2012年11月15日に約2時間のインタビューを行った。Aさんは単独でインタビューを行ったが、TさんとMさんは個別にインタビューの時間をとることができず、二人同時のインタビューとなった。

事前に用意した質問項目を投げかけるのではなく、ラルクとファンの距離について会話を進め、その都度質問する形式をとった。潜在的な意見を聞き出すことに有効であると考えたからだ。

ここから、詳しいインタビューの内容について触れていきたい。

—ラルクとファンの距離はどうだと感じていますか。

T「近い近い近い。めっちゃフレンドリーやん。」

—なぜそう思いますか。

T「気さく。」

—キャラ的な問題ということなのかな。

T「喋り方。お客さんに向かって敬語で話すアーティストとかいるやんか。彼らはそんなこと絶対しないやん。テレビはよそよそしく感じる。テレビは言ったらいけないことが多すぎてさ、すごい言葉を選んでる感が出る。」

M「テレビに縛られてる。でもあんなおっきいバンドやのに、ライブハウスでやるっていうのが近いよな。みんなやってくれるやん。近くで見れるっていう。」

—ライブハウスじゃなくて、こないだのユニバーサルスタジオジャパンのライブ²⁰⁾みたいななのでも近く感じますか。それとも、そんなに近く感じませんか。

T「会場が大きくても、ファンに歌わしてくれたり、サブステ作ったり²¹⁾とか、花道通ったり²²⁾とか。遠いところにいるても、絶対楽しませてくれるから距離感は生まれない。」

上記はMさんとTさんがラルクを近い存在と感じている発言である。彼らの気取らない性格やライブでのファンに対する細やかな気遣いのようなものに「近さ」を感じている。一方で、ラルクに対して「遠さ」を感じたり、ファン自ら距離をおいているととれる、以下のような発言が目立った。

—すごいから好きなのか、近いから好きなのか。

M「近いけど、近くはないよな。距離的な問題では遠い。」

T「親近感として実際に近い、知り合いになりたいかって言われるとはそうはなりたくない。だから憧れのままでいい。」

M「憧れの存在であってほしい。」

—ライブで、バナナ投げる²³⁾とかふざけるところとか、それに親近感をおぼえることはないのかな。

M「覚えるけども、やっぱり憧れのままでいい。」

T「それをステージと客席でやるのがいいねん。そんなとこで親近感わかされても、いやいやちょっとってなるやん。」

M「この距離感がいい。ステージとお客さんと、それ以上ではないねん。」

—それ以下だとどうですか。

T「ちょっとさみしい。ちゃんとラルクファンっていうカテゴリーで。プライベートは踏み込まずにいいかな。そういうことはしたくないねん。」

—それはなぜ。会えたら嬉しいのでは。

T「嬉しいけど怖いわ。なんか嫌やねん。」

M「素性を知りたくないとかかな。」

T「それはたぶん何も見てもうちは嫌いにならないから。」

M「ならんならん。泥酔して寝転んでてもな。」

—プライベートに踏み込みたくないわけではない。

T「踏み込みたくないわけではないけど、そんな機会はいらない。」

M「偶然転がり込んできたらいいけど。」

T「自らがつつきたくはない。迷惑にはなりたくないねやんか。」

M「迷惑やと思われたら死ぬ（笑）。」

T「やからその領域には踏み込みたくない。」

M「それぞれ。嫌われたくないねん。」

—ラルクがもしFCイベントとかグッズの手売りとかをできたならば、それは嬉しいですか。それともラルクにそこまでしないで欲しかったって思いますか。

A「今の規模の話でなら、してほしくないかも。もうラルクは世界のトップスターなわけで伝説になろうとしてるわけですよ。そこまでしてるバンドが売上気にして手売りとかしだしたら私はちょっとファン続けるかどうか悩むかもしれん。」

—プライベートに踏み込みたいと思うことはありますか。

A「絶対いや。ただ単に本人のお休みの邪魔をしたくない。」

—もしhydeが来ていいよってなったら行きますか。それとも嫌ですか。

A「hydeがいいって言ったらまあ行くんじゃないかな。やっぱり本人の嫌がることはしたくないよね。それは絶対的にいや。仕事やと思うねん、ファンと接するっていうのが。だからせっかく貴重な休みの時にまで、疲れさせたくないし、仕事のこと考えて欲しくない。あんまり関わりたくないよね。」

以上のように、ファンは自らラルクに近づくことを望んでいないことが窺える。

この他にも「グッズやCDをたくさん買うよりも、ライブの本数を行って一緒に楽しむことの方がいい」、「ファンとの交流ってライブで、生で見れる、一番距離が縮まる方法やと思う。物理的にもやし、精神的にも。」、「ライブが全部自分の中心。」、「ラルクはライブっていう場所自体特別で、ラルクと一緒に空間にいれることが奇跡。」、「ライブで同じ空気を吸えるっていうことがすごい嬉しい。」などのライブを特別視する発言が多くあった。このことから、アーティストとファンという立場を守っていたいことが分かる。世界のラルクである、メディアスターとしての彼らを遠く感じている一方で、その「遠さ」は決してファンにとってマイナスな意味のみではないのだ。

また、「嫌われたくない」「迷惑になりたくない」という発言があった。相手を優先させること、嫌われないための努力や気遣いは、純粋な乙女心のようなものである。「遠さ」がある中でも、ライブという場で同じ空間を共有できることの喜びも、それに近いものがある。ラルクファンは、あくまでファンであることを望んでおり、ラルクを恋愛対象として見ているわけではない。彼氏にしたい、結婚して欲しいといった感情を抱いているわけではないが、そこに存在している乙女心というものは非常に興味深い点である。

さらに、以下の内容にも注目してもらいたい。

—ラルク側に自分たちの声が届いているという意識はありますか。

T「期待してることを裏切らないっていうのは絶対ある。まあ追加公演、東京のどっかでやるやろなって思ってた、そこまでやるかっていう。国立競技場をとって、バンド初²⁴⁾みたいな。それで、なんかさ、誇らしくなることをしてくれるよね。日本で初めてとか、バンドで初めてとか。」

—ファンの期待がなんでラルクに分かると思いますか。

T「長年やってたら分かるんじゃないかな。どういうことをしたらファンが喜ぶとか、次どういふのやったらいいとか。向こうも研究してらっしゃるんやと思う。」

M「それができてるから売れ続けてるんやと思う。調子のらへんし。次の目標、次の目標って。」

—基本的にファンの期待は裏切らないと思いますか。

A「そうですね。いつも斜め上をいってくださって。」

—Aさんはラルクを信頼していますか。

A「それなりに信頼はしてるかも。どこまで信頼してるって100%の答えは出ないような気はするけど。大きいバンドは急に止まれないと思う。急に解散しますってできないと思う、ラルクぐらいでかいと。だからしばらく活動は続いているっていう。大きいからの安心感みたいなのかなー。でも今のラルク見てたら絶対解散はしないやろうなっていう信頼っていうか安心感っていうかそういうのは雰囲気ですごい感じるけど。」

ラルク側への信頼が強く、かつファンが「ラルクはこうであろう」という理想像を持っていることが読み取れる。アーティストであるL'Arc～en～Cielという存在が生み出す虚構性が、ファンにとって重要度の高いものとなっているのではないか。

メンバーの気取らない性格やキャラには「近さ」を感じるものの、世界的なバンドとなった「遠さ」は感じてしまう。その「遠さ」はファンにとっては決してネガティブな意味での「遠さ」ではなく、アーティストの立場とファンの立場を守ることにこだわりを持っており、その距離感の中でファンは純粋な乙女心を見せている。また、自らが描く、理想のラルク像に対して期待や安心感を抱いている一面もある。

以上がラルクのファンを対象に行ったインタビューの結果である。

(2) 「遠さ」が抱かせるL'Arc～en～Cielの理想像—アンケート調査から—

インタビュー調査で明らかになった点を裏付け、また不十分な点を補うた

め、簡易的なアンケート調査を行った。2012年11月26日に筆者友人の6名のラルクファンにメールを送り、自由記述で質問に答えてもらった。質問内容は「①ラルクとファンの距離感を一言で表すなら何か。」「②長年ラルクファンを続けていられる理由」の二点である。①は5名、②は1名から次のような回答を得られた。

① ラルクとファンの距離感を一言で表すなら何か。

Kさん (20歳・男性・ファン歴10年・ファンクラブ歴3年)

「月とすっぽん。同じ人間なのに、ものすごく遠い存在だから。ラルクに関しては、大好きって感情より憧れの方が強いから、頑張っってそれに近づきたくても手が届かない存在だし。」

SAさん (21歳・女性・ファン歴9年・ファンクラブ歴6年)

「憧れが現実になると、憧れの価値が下がるし、アーティストとファンの距離感って守ってこそファンで居続けられるんじゃないかなあと思うのよね。そういう意味で、ラルクは私に夢を見させてくれる、こだわりの距離感も保ち続けられるから、私はずっと追いかけて行きたいオンリーワンの存在だって思う。届かない存在だからこそ、ずっと夢見てたいって思うんだよね。こんな次元の話は、ラルクみたいな国民的なアーティストにはあんまり通用しないかもしれないけど、「私のラルク」ってみんな持ってると思うから、これが私の思うラルクとの距離感です。一言にまとめると「夢は夢」って感じかなあ。」

SIさん (20歳・女性・ファン歴10年・ファンクラブ歴6年)

「距離感が縮まることはなくて「夢は夢」なんやけど、その夢の中でも最高の夢を魅させてくれて、気が付けばその中毒性に夢中になるってゆうか、ラルクはドラッグみたいな感じ(笑)ファンはジャンキー(笑)」

Tさん (21歳・女性・ファン歴10年目・ファンクラブ歴5年目)

「ラルクは私にとっては『かけがえのない存在』です。このかけがえのない存在っていう言葉は普通身内やったり、友達とかで使うと思うけど、あえて手の届かない存在にいるラルクに対してその言葉を使いたくて…普通アーティストとか芸能人に対してある程度の距離があって、女優さんとかやったら憧れの遠い存在っていう距離やったり、芸人ならプライベートの情報もわかったりして身近な距離があると思うんですけど、ラルクにはそれにあてはまらない距離っていうのがあると思います。憧れの存在で夢を与え続けてくれて、高いクオリティを維持していて、世界にも進出しているトップアーティストで、自分の好きなアーティストがワールドクラスのバンドっていう誇りを与えてくれて、それが遠い距離や大きな壁のように感じるときもあるんですけど…もう一方では、気さくな性格のメンバーがライブとかではラフに関西弁をしゃべったり、地元の話とかしてくれたり、くだけた感じのままですごく親近感を感じることができるし、あれだけ凄い人達がこんなにも気さくにファンに対して話してくれるっていう喜びを与えてくれると思います。だからこの二面性を一言で言うなら…『大きな透明の壁』って感じかな。ある程度、音楽に関してもプライベートに関しても一定の距離感や壁を感じるんですけど、それは決して嫌な壁や距離じゃなくて、ファンとアーティストという関係のマナーを両者が守ってるからこそ成り立つ距離感だと思います。」

Aさん (22歳・女性・ファン歴12年・ファンクラブ歴12年)

「私は「ちょっと色のついた透明の壁で隔たれている。」ラルクとの距離は近いようでやっぱり遠くて、壁がある。ちょっと別次元で、一定の距離感を保っている、越えられない壁。壁は透明だから向こう側はよく見える（たくさん情報を発信してくれる）けど、色付き眼鏡というかフィルターというか…ファンには自分なりの、「こうであって欲しい」

というラルク像があつて。ラルクは多分、「こう魅せたい」っていうのがあると思う。それが色。つまり、お互いに少し壁を作つて、フィルターをかけてる、そんな関係。」

② 長年ラルクファンを続けていられる理由

SAさん

「バンドに永遠ってないよね。私は永遠じゃないからこそバンドに必死になれるんだと思う。冷たい言い方だけど、ラルクも永遠ではないんだよ。それは本人も言ってるし、そりゃそうだよ。ラルクは永遠だって言う人も私はそれはそれで素晴らしいと思う。でも覚悟はしないとならない。夢は夢ってキラキラしたこと言いながらすごく現実なこと言ってるけど、好きで居続けることって本当は大変なことだと思うのよ。今私が生きてる間にラルクがいる、それってよく考えたらえらいことで、最高にラッキーなことだと思うの。永遠がないのならそれまで好きで居続けよう、悔いを残さないようにって思う。」

ここでも、先に挙げたインタビューの結果と同じように、アーティストとファンの距離を保ち、その距離が決して嫌なものではないことが分かる。加えて明らかになったことは、ラルクは夢を見させてくれる存在であるということである。アーティストとファンという距離を保ち、プライベートを知り過ぎないでいることが、ラルクの虚構性を高め、そしてファンは理想像、つまり夢を抱ける。世界的なバンドというその壁こそが、理想化しやすくさせ、ファンに夢を抱かせることを可能にしているのである。

また、夢を見させてくれる一方で、永遠ではないことにもはっきり気づいている。メンバー全員が40代という、決して若くはない年齢ではあるものの、デビュー当時にも劣らない美貌や、精力的な活動。この時間が永遠に続くのではないかと錯覚してしまいそうな状況の中でも、いつかは解散してしまうのだと、最も活動の継続を願うはずのファン自身が認識しているのだ。この

ような、いつかなくなってしまう存在という、はかなさのようなものも、両者の距離に影響を与えているのではないか。

Ⅲ L'Arc～en～Cielとファンの関係性

ここまで、メンバーのインタビューによるラルク側のファンの位置づけ、ファンへのインタビュー・アンケート調査によりラルクへの距離を述べてきた。最後に双方の発言や考え方を照らし合わせ、ラルクとファンがどのような関係を築き、ラルクはファンを定着させ続けているのかを探っていきたい。

ラルクは自分たちを応援してくれるファンを突き放す発言をしていてもなお、ファンとの壁はできていないと本人たちは感じている。むしろ、本来ならば「近さ」を感じられるはずであろう初期の頃は「遠さ」があり、活動を続け、大物バンドとしての地位を確立してきた中で、その距離は縮まってきたという発言さえあった。

その一方で、ファンはアーティストであるラルクに「遠さ」を感じてはいるものの、それは精神面での「遠さ」ではなく、あえて望んでいるような様子が見られる。その「遠さ」の中で感じられる些細な「近さ」がファンにとっての喜びであり、ラルク側の考えを優先させ、芸能人である彼らに嫌われないための努力をするという、乙女心を覗かせる。さらに、この「遠さ」こそ、ファンがラルクの理想像を作り出す要素となっていること、夢を見させてくれる存在ではあるが、永遠ではないという認識をファンが持っていることを前章では指摘した。

冒頭に挙げた、スターの要素となる「親近感」であるが、広辞苑第五版によると「身近なものとしての親しみ」とある²⁵⁾。ラルクとファンのこの距離感が決して「親近感」ではないことはこれまでに示してきたもので明らかであろう。

それでは宮本²⁶⁾や小川²⁷⁾が指摘しているように、制限があるからこそという価値が生まれ、ラルクはスターとなってきたのだろうか。

繰り返しになるが、ラルクのファンはアーティストとファンという立場にこだわり続け、この距離によってファンは理想のアーティスト像を作り出すことができる。ここで、ラルク側の「引き」の発言を思い出してもらいたい。ラルクはファンの望む通りにはしないことを、あえてファンが見る媒体を通じて語っている。これらの発言によりファンは、自分の描いている理想通りにならないという感覚を持ち、また、先のアンケート調査の結果でも見られたような、いつか解散してしまう、永遠ではない存在と感じているのではないか。

ラルクとファンの間には、夢を見られる存在である一方で、理想通りにならない、永遠ではないという認識がある。このような不安定な関係こそが、ラルクがファンを長年繋ぎ止めておくことのできる要素の一つだと考えられる。

したがって、時間・空間を限定することが緊張感を生み、飽きさせないことだと指摘されているが、ラルクの場合、いつか解散してしまうという時間の制限に加え、手に入りそうで手に入らない存在という制限が、緊張感を生み、ファンを飽きさせないようにしているのである。

ラルクとファンの間には「遠さ」があり、とはいえ単なるアーティストとファンという言葉で片づけられる関係でもない。そこには一定の「距離」が存在しているのだ。

Ⅳ バンド成功における「距離」の重要性

以上、ラルクとファンの関係性について述べてきた。

ラルクのファンは、ラルクの気さくなキャラクターには「近さ」を感じているが、ファンとアーティストという「遠さ」に居心地の良さを感じている。この「遠さ」こそ、ラルクの虚構性を強め、ファンに理想や夢を抱かせている。

一方で、ラルク側は、ファンの意見すべてを活動に反映してられない、

ファンは自分たちを100%理解できないと公言している。このような発言がなされることで、ファンが安心できないような緊張感が生まれ、ラルクに飽きないのだ。

優しい言葉をかけられ、時には突き放され、自分の思い通りにならない状況において、小さな変化に一喜一憂し、相手の気持ちを優先させるこの関係は、まるで恋愛のようである。しかし、この恋愛は叶わないままでよいのだ。想いが実るか実らないかという不安定な状況だからこそ、いつまでもファンは恋をしたばかりの乙女のようなドキドキした気持ちを抱くことができ、ラルクを思い続けることができる。

ファンに片思いをさせ続けるラルクと、片思いであり続けることを望むファン。この関係こそが、消費の早さが指摘される今日の音楽産業においても、ファンを飽きさせず、定着させている要因であり、20年を超えるバンドとして成功できた理由のひとつである。

また、ラルクはファンクラブ会報等のインタビューにおいて、その活動の長さや規模の大きさに反比例してファンとの距離が縮まっているような気がする」と語っている。つまり、両者の間にある緊張感や不安定さは、ラルクがファンを繋ぎとめていられるだけでなく、心的な「距離」を近づける要素でもあるのだ。

ラルクという手の届かない大きな存在と、近づきたがらないファンの間にある「近さ」。これは、物理的な距離を埋めることがアーティストとファンの「距離」を縮めるわけではないことを示している。数々のアイドルやバンドが、握手会、FCイベントといったファンとの交流に積極的である昨今の状況が、ファンの獲得や定着において必ずしも有効ではないことを示唆する、新たな発見である。

これらのことから、ラルクのように長年活動を続けられるようなアーティストとして成功をおさめるために考えられる要因は、次の二点である。第一に、アーティストとしての「遠さ」や、いつなくなるか分からないという危機感をファンに感じさせ、ファンが追い続けることのできる存在であること

だ。第二に、「遠さ」のなかでも、ファンがアーティストに大切にされていると感じられるような機会がなければならない。そのような場として、物理的な距離を近づけるファンサービスや、インタビュー等で発言が用いられるべきである。安心できる機会と、予測できない不安定さによって、恋する乙女のような初々しい気持ちを持ち続けたままファンでいられることが、今日におけるアーティスト成功のための一般的な条件である。

本稿はL'Arc~en~Cielというアーティストと、コアなファンという特定の事例を挙げ、関係性を述べてきた。この研究がすべてのアーティストに当てはまるわけではもちろんない。国民的なバンドといえども、ラルクは限定された一部の人間から支持を受けているだけである。美空ひばりや、最近ではアイドルグループ嵐、AKB 48 などのように大衆に人気があり、日本人なら誰でも知っていると言えるアーティストではない。したがって、狭い範囲の中での制限のある研究となってしまったことは、本稿における一番の問題点である。

さらに、インタビュー対象者は女性のみ、アンケート調査の対象者においても6名中、男性は1名のみである。男性ロックバンドには女性ファンが多いという考えが一般的ではあるものの、それでも嵐やAKB 48のファンのように極端な男女比ではない。本稿の調査では、男性の意見が少なく、女性に偏った調査と分析になってしまい、ファン全体に言える結果ではないという点も欠点のひとつである。

また、筆者がラルクファンとして関わってきたことも、ラルクを研究対象にしたことの理由のひとつであるが、それによる見解の偏りも否定できない。それでも、アーティストが「会える存在」となりつつある中で、アーティストとファンの関係性に興味を持つような読者にとって、少しでも参考になれば幸いである。

最後に、本稿執筆にあたり、ご指導いただいた先生方、インタビューやアンケートに協力してくれたラルクファンの友人に心より御礼申し上げたい。

注

- 1) オリコンスタイル<http://www.oricon.co.jp/news/rankmusic/2005490/full/> 参照。
- 2) 南博『体系社会心理学』光文社, 1957年, 437~438ページ。
- 3) 東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし—売る・読む・楽しむ』勁草書房, 2003年, 308~309ページ。
- 4) 宮本直美『宝塚ファンの社会学—スターは劇場の外で作られる』青弓社, 2011年, 179~183ページ。
- 5) 小川博司著『音楽する社会』勁草書房, 1988年, 85ページ。
- 6) http://userserve-ak.last.fm/serve/_/72514022.png (2012. 12. 03 確認)
- 7) 1990年代後半, 記者会見風のテレビCMや, 新聞広告にてメンバーが坊主になったり, ゴルゴ13に変身したりと話題になった。近年では38thシングル「XXX (キスキスキ)」のプロモーションとして, 写真週刊誌「FRIDAY」にラルクのメンバー同士の合成キス写真を掲載したり, 最新アルバム「BUTTERFLY」のテレビCMで, 木村カエラが登場するという前代未聞のプロモーションを行い, 注目を集めた。
- 8) 荒川れいこ・今元秀明『is』シンコーミュージック, 1998年, 77ページ。
- 9) L'Arc〜en〜Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 50, 2007年, 38ページ。
- 10) 寶井秀人『THE HYDE』ソニーマガジズ, 2012年, 182~185ページ。
- 11) L'Arc〜en〜Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 66, 2011年, 11ページ。
- 12) L'Arc〜en〜Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 67, 2011年, 23ページ。
- 13) L'Arc〜en〜Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 70, 2012年, 6ページ。
- 14) tetsu『哲学』ソニーマガジズ, 2004年, 259-260ページ。
- 15) 鹿野淳/FACT『WORDS』角川マガジズ, 2005年, 191ページ。
- 16) 鹿野淳/FACT, 前掲書, 204ページ。
- 17) L'Arc〜en〜Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 70, 2012年, 22ページ。
- 18) 寶井秀人, 前掲書, 182ページ。
- 19) 2003年に公開された, Gackt・HYDE主演の映画。
- 20) 2012年5月19日, 20日にユニバーサル・スタジオ・ジャパンにてライブを開催。2日間で10万人を動員。最新音楽ニュースナタリー<http://natalie.mu/music/news/69673> 参照。
- 21) ラルクがドーム級の会場でライブを行う際, アンコール時にアリーナ後方に簡易ステージが設置される。
- 22) アイドルのコンサートのように会場全体に伸びたものではなく, メインステージのサイドに伸ばされただけのもの。

- 23) ラルクのライブでは、ベースのtetsuyaが「俺のバナナが食べたいかー！」という決め台詞と共に本物のバナナを投げるのが恒例となっている。
- 24) 2012年5月26日、27日に東京・国立競技場にてライブを開催。同会場でライブとして使用するのは史上4組目、バンドとして初の試み。2日間で11万人を動員。CDジャーナル<http://www.cdjournal.com/main/news/larc-en-ciel/45045> 参照。
- 25) 広辞苑第五版, 岩波書店, 1998年。
- 26) 宮本直美, 前掲書, 179~183ページ。
- 27) 小川博司, 前掲書, 85ページ。

参考文献・ホームページ

- ・荒川れいこ・今元秀明『is』シンコーミュージック, 1998年。
- ・BARKS <http://www.barks.jp/news/?id=1000076814> (2012. 12. 03 確認)。
- ・CDジャーナル <http://www.cdjournal.com/main/news/larc-en-ciel/45045> (2012. 12. 03 確認)。
- ・東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし—売る・読む・楽しむ』勁草書房, 2003年。
- ・広辞苑第五版, 岩波書店, 1998年。
- ・L'Arc~en~Ciel Official Web Site <http://www.larc-en-ciel.com/jp/> (2012. 12. 03 確認)。
- ・L'Arc~en~Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 50, 2007年。
- ・L'Arc~en~Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 66, 2011年。
- ・L'Arc~en~Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 67, 2011年。
- ・L'Arc~en~Ciel Official Fan Club Magazine LE-CIEL Vol. 70, 2012年。
- ・南博『体系社会心理学』光文社, 1957年。
- ・宮本直美『宝塚ファンの社会学—スターは劇場の外で作られる』青弓社, 2011年。
- ・小川博司著『音楽する社会』勁草書房, 1988年。
- ・オリコンスタイル <http://www.oricon.co.jp/news/rankmusic/2005490/full/> (2012. 12. 03 確認)。
- ・最新音楽ニュースナタリー <http://natalie.mu/music/news/69673>
<http://natalie.mu/music/news/58018> (2012. 12. 03 確認)。
- ・鹿野淳/FACT『WORDS』角川マガジズ, 2005年。
- ・寶井秀人『THE HYDE』ソニーマガジズ, 2012年。
- ・tetsu『哲学』ソニーマガジズ, 2004年。